２０００/１０/０３

自分の価値

曾　芳代

下村お父さんから２回目の卓話の依頼を受けたとき，何を話しましょうかと，ずいぶん迷いました。迷った末，お父さんにアドバイスを求めました。そして，お父さんから教育の愛のムチを受けました。何でもいいから，自分が話したいことを話すのが大事ですと。「情けない自分」とかのテーマでもいいですと。お父さんのアドバイスを受けて，ファンちゃんが自分の成長経験を話す気になりました。ずいぶん，身勝手な身の上話かも知れないですけれども，ファンちゃんがそれを経験してから，今の自分になっているのです。

生まれてから２７年の月日が経っています。そのなかでも，この留学の６年間が一番実り多い時期だとファンちゃんが思っています。以前自分や周りの人がまいっってきた種が，ようやく芽を出し，実を結びました。ファンちゃんの経験はもちろん１つの特殊例に過ぎませんけれども，そのなかにロータリアンの皆様が今後の国際交流を行う際に有益な情報が隠されているかも知れないと思います。ファンちゃんがここで自分の経験をもって，お説教をするつもりがありませんので，何が有益であるかを聞いていらっしゃる皆様の判断に任せたいと思います。それでは，今からファンちゃんの本題に入りたいと思います。

今日のテーマは「自分の価値」です。これは，小さい頃からずっとファンちゃんを悩ませた問題です。ファンちゃんが２，３歳の時に，「人間が何故ご飯を食べるのですか？」を聞いたことがあるそうです。お父さんが「大きくなるためよ。」と答えたそうです。そこでファンちゃんがまた，「何故大きくならなきゃならないのですか？」と聞いたそうです。このように小さいときから，変な問題を聞く子として有名になっていたようです。そして，２７歳の現在，ファンちゃんが自分の問題「自分の価値は何でしょう？」のに対して，「生きること。それも，みんなの中に生きること。」という答えを出したいと思います。この答えは，今までファンちゃんの歩いてきた感想だとも言えると思います。

ファンちゃんは台湾の板橋という街の旧家に，長女として生まれました。板橋は人口数で並べると，台湾の５番目大きい街です。曾家は地方でそれなりの影響力を持つ家族です。親戚２０戸くらいが１つのマンションの中に，一緒に住んでいるという今頃の台湾でも珍しい営みをしています。大家族ということで，色々の身内の葛藤（かっとう）も当然あります。まあ，それはともかく，大家族のおかげで，父が３０歳の時に始めての市議員当選を果たしました。ファンちゃんが生まれて翌日のことです。

政治って言うものは汚いものだと，ファンちゃんがずっと思ってきました。留学に来るまで，台湾のこと，国内の政治や社会のことに全然関心を持たなかったのです。なぜならば，うちの家族は父が政治をすることによって大きく傾いたからです。母が５人の子供を抱えて，一時期自分で町工場を起こして，家庭を守りました。私たち３人の姉妹がときどきお手伝いもしました。政治舞台に活躍している父は，その頃家庭を顧みることが少なかったです。中学校に上がっても，ファンちゃんは父が偉い議員さんと，いっぱいな本を持っているというイメージしか持っていなかったです。本を読むことがファンちゃんの趣味でもあって，父がいっぱい高い本を与えてくれました。偉い議員さんだと分かったのは，父が学校のPTA会長を務めたからです。仕事ぶりを一切見せなかった父ですが，そんな父の寄贈した小さい池が校庭の一隅にあると発見したときはびっくりしました。父のおかげさまで，板橋を離れ台北市の高校に入るまで，ファンちゃんがずっとクラスの有名人の様な気がします。人間関係にうといファンちゃんにとって，これは結果的にいいものではありませんでした。

ファンちゃんが小さい頃から，家族の中に優等生として可愛がられていました。褒められることは，いつも成績が良かったこと，頭が良かったこと，大人の言うことを聞き５人兄弟の模範をすることです。今思い返すと，ずいぶん大人びた子供でした。昔の写真の中に映っていたのは，今のようにルージュが飛び出さんばかりの笑顔ではなく，いつもどこかに憂うつな顔をしていました。

小学校を１年飛び級して卒業して，中学校は天才の集まりの特殊クラスに入りました。同じ時，台湾も政治における民主化の嵐に突入しました。父がどのような政治理念を抱いているかは知りませんが，後から母の話しを聞くと，その時うちには電話の盗聴と２４時間の監視がついていました。家庭の雰囲気がだんだんおかしくなって，その時ファンちゃんが訳を分からず，目をつむって勉強だけに集中しました。中２の時，父が国民党を離脱し，無所属で市長選挙に出ました。それはどれ程大変なことというと，昔の国民党に反対する人が大勢闇に消えてしまう時期もあったを申しますと，お分かりになると思います。

ファンちゃんがクラスの中にいじめに遭ったのもその時期でした。それは単純に言葉を使ったいじめであった。市長選挙に出た父が，悪質なビラ攻撃にあったことがありました。いじめっ子たちが，ちなみに男の子でしたが，それらビラの攻撃文句をもって私にぶっつけました。父の街頭演説の音量が大きすぎて，勉強の邪魔だという文句も来ていました。もちろん，父がファンちゃんのいじめに遭った原因の全てだと思いません。原因は，

ファンちゃんの気が弱かったかもしれません。気の弱い女の子に有名な父がついていて，これほど邪魔な存在が無いかもしれないでしょう。いじめが１年ほど続いていました。
　幸いなことに，ファンちゃんのあったいじめは日本のいじめと違っていました。みんながいじめっ子を怖れることがありませんでした。みんな最初は，ファンちゃんにも非があるのではと思って，観察する態度を取っていました。親友がいじめっ子が悪いだから，無視すればいいと言ってくれました。いじめが始まった半年後，ファンちゃんが母に相談しました。母のアドバイスに従い，いじめの事情を担任先生に打ち明けました。担任先生がいじめっ子を叱り，クラスの男の子たちもだんだんいじめっ子の男達に嫌気をさしました。はっきりした理由もなく，女の子をいじめるなんて最低だと，いじめっ子が敬遠されました。ファンちゃんもやっと，自分にはこんないじめに遭わなければならないまで，悪いことろがないと，少し自信を持つようになりました。以前と同じように，堂々と振る舞うように務めました。その中で，いじめがだんだん消えて行きました。
　いじめの最中，ファンちゃんの父の選挙結果が出ました。今になっても当時の国民党が不正をした可能性が否定できないまま，父が落選しました。選挙の時，ファンちゃんたちも色々手伝いました。見学旅行に行かせてもらえず，街頭に立ち，ビラを配ったりしました。そして，今でもはっきりと落選の夜のことを覚えています。あちこちの開票結果を見て，口にはしないものの，みんなが落選を悟りました。残酷な結果が出る前，ファンちゃんが１人でひそかに，事務所を抜け出しました。ふらふらと母方のおじさんの家を訪ねました。おばさんが熱い麺をファンちゃんに食べさせてから，ファンちゃんが今でも忘れられない言葉を言ってくれました。「今父と母が一番辛いだから，長女のファンちゃんが兄弟の面倒を見て，親を助けなければならないと。」人生には，いくら頑張っても，望んでもどうしようもないことがあると，中２のファンちゃんが初めて分かりました。
　市長選の敗戦の雰囲気を引きずったまま，父が半年後の国会議員選挙に出ることを決めました。これはまずい決定でした。大家族の中で色々のもめ事が起こり，父が最後，一家の夜逃げを決めました。少数の身内だけが見送りに来ました。今思い返すと，夜逃げの前にも色々前兆がありましたが，知るのが怖くてファンちゃんが勉強に逃げました。夜逃げをすることを知ったのは，放課後のことでした。自分の荷物をまとめろと言われました。事情を飲み込めないまま，身内の親戚が深夜集めてきました。涙が止められなかった一夜でした。その夜に，同じ言葉を何回か聞きました。「今父と母が辛いだから，長女のファンちゃんが兄弟の面倒を見て，親を助けなければならない」と。
　当時，選挙期間の立候補者の出国は違法でした。人目を避けながら，一家が日本に着きました。山梨県の甲府に住む父の友人を頼りに来ました。１カ月の日本滞在，将来について色々検討した結果，父が台湾に戻り，台中に住むことを決めました。末っ子を親がつれて行くことに。そして，われわれを板橋の家族が引き取りました。曾家が長男だけを引き受けました。母方のおじさんがわれわれ３人姉妹をまとめて引き受けるつもりであったが，父の妹家族がファンちゃんの引き受けを申し出ました。われわれ一家は蒋介石国際空港の玄関で別れました。ファンちゃんが中３前期の終わり頃の話でした。
　曾家，母方のおじさんの家とファンちゃんが住む父の妹さんの家は，同じ団地にありました。しかし，それでも，半年間弟と妹たちに会えることが無かったです。後で聞いたら，私の受験に邪魔にならないように，おばさんが面会を禁止したようです。
　日本への夜逃げのショックが，受験の観点からすると，ファンちゃんには結構いい薬になったようです。さっそく，おじさんが学校へ連絡をしました。それを受けて，教頭先生が放課前クラスメートたちに，何事もなかったようにファンちゃんに接してくれと，お願いをしました。もちろん，色々な噂が地方の新聞紙に取り立てられていました。それにもかかわらず，学校からファンちゃんがもらった最初の連絡は，「明日の朝，英単語の小テストがあります。」という学級委員の電話でした。今思い出しても，その間抜けさが面白かった。翌朝，学校に行ったら，誰も何があったかを聞いてこなかったのです。ファンちゃんがそのまま，今までの心情と記憶を全部整理しないままそっぽに置いて，高校受験に突入しました。おばさん夫婦の受験世話のおかげで，ファンちゃんが誰も予測のできなかった第１志願に合格しました。
　ファンちゃんの高校受験を賭けて，試験前に父が家を台北県永和市に越しました。妹と弟達が転校し，われわれ家族がまだ一緒に住みました。高校時代のファンちゃんが単純すぎるとの評判を受けました。普段が色々な雑学本を見るが，高３の受験になると成績ばかりに気をすると。自分ばかりのことを考え，周りの話題に全然興味を示さずというのはクラスメートが，ファンちゃんに対する評価でした。クラスの中に浮いてしまいましたが，それでも少数の理解者に恵まれていました。そして，ファンちゃんミラクルが再び起こり，意外にも第１志願に合格しました。
　台湾大学に入り，ファンちゃんが受験地獄から解放されました。父も板橋にある家族の元に戻ることを決意しました。これから一応，われわれに平和な生活が戻りました。途端に，ファンちゃんの歯車が狂い始めました。今まで，直面していなかった記憶と感情が押し寄せてきました。それはファンちゃんが乗り越えなければならない山でした。自分との戦いでした。それをアイデンティティの危機と呼ぶ人もいるでしょう。

今まで，辛い思いばかりしてきました。人に迷惑をかけないように頑張ってきたのに，いじめにもあったし，人間関係が上手くできないから自分も他人をも傷つけばかりして，人間として最低だと思いました。また，成績のいい自分だけが望まれていたと思い，愛されるのがいい成績の出せる頭のよさであり，生身の自分ではなかったと思いました。父がファンちゃんをおしとやかな，３界家なしの女性に育ちたかったです。そんな父の望んだ通りになれない自分が，大学に入ってから見えてきました。大学時代，自己成長のためのクラブに入り，ファンちゃんは生きる理由を見つけることに一所懸命でした。

その時，親友に死にたいと愚痴ったこともあります。何故自分が，辛い思いをし続けなければならないのか，こんな人生なら何故続く必要があるのかと聞いたことがあります。親友が，「あなたが死ぬと，私たちが物すごく悲しむのよ。」と答えてくれました。その時のファンちゃんにとって，このような答えは意味を持ちませんでした。他人のために生きることに疲れたからです。当時のファンちゃんが愛を負担，そして他人がそれ，つまり愛を口実に自分に要求を突き付ける物としか思えませんでした。つまり，他人の要求に応えることしか自分に愛される価値，生きる価値が無いと思っていたのです。今までの自分がそうしてきたように。

ここで，ファンちゃんが「自分の価値」という問題にぶっつけました。大学の時，この問題を解決することができなかったけれども，自分には死ぬ勇気がないことも発見しました。そして，全額の奨学金と，「学位を取れなくても，生きて帰ってくれ」という母の言葉をもって神戸へ渡りました。博士課程に入るまで，ファンちゃんの学業が順調でした。ファンちゃんが試験にめっぽう強かったからでしょうと思います。

博士課程に入る前に，ファンちゃんが第１関門の試練を迎えました。博士課程に進学資格は持っているけれども，奨学金がここで切れるのです。実家に仕送りをする能力がないことは百も承知です。また，それをこれぽちも期待していないのです。父が「修士号で充分だから，アルバイトが勉強より多くなるような留学はよせ。出稼ぎしに行ったのじゃないから，帰れ。」と言ってくれました。「出稼ぎじゃない」と言う父の言葉に，ファンちゃんが救われました。始めて，自分の価値が学位取得の目標より高く感じたからです。そして，父のアドバイスを逆らい，もらえるのであろう奨学金の可能性に賭けて進学を決めました。

この決断をするに至るまで，一緒に九州大学に留学し，修士で学業を終える親友の言葉も忘れられなかったのです。彼女が自分の貯金を貸してもいいと申し出てくれました。「君には返す能力があると見込んだからですと。友達からの投資だと思い，受け取ってくれ。」と言ってくれました。このとき，ファンちゃんが自分には何にかの価値があると分かりました。曾家の娘としてではなく，丸腰の自分でも人が助けてくれると実感しました。そして，始めて自分の意見を通しました。博士進学を決めました。ここで，奨学金の希望に賭ける勇気さえ無かったら，ここで負けたら，将来上手く行くはずが無いと思いました。学位がもらえるかどうかが別問題として，くじけないことこそ大事と自分に聞かせました。

そして，ラッキーなことに，いちばん奨学金がとれにくい博士１年生の時には神戸市の奨学金に恵まれました。そして，去年からはロータリー米山記念奨学金を頂き，こうして毎月皆様とお会いすることができました。ファンちゃんの運の強さは，たまには自分も信じられないものです。もちろん，奨学金の問題が解決したから，万万歳な訳ではありません。厳しい博士課程の試練がファンちゃんが待ち受けていました。

指導教官がファンちゃんに自分で問題を発見し，それを解決するような指導方針をとっています。自分が何をしたいかを自覚しなさいというのが先生のお言葉でした。しかし，「自分」とは何か，考えるほど答えが遠くなりました。日本人の焦点をぼやかす柔らかい物の言い方と精神論をばかり言うようなコメントが，ファンちゃんを追い詰めました。そもそも，自分は人間関係が上手くできず，特に人の裏を読めない人ですから。さらに，ファンちゃんの直線的な言い方は，自分の意見を押し通し，人の意見を聞くつもりが無いと解釈されました。去年の４月当たりファンちゃんが窮地に立たされました。

幸いなことに，幸運の女神がファンちゃんを見捨てませんでした。偶然なことで，ある同僚に自分の悩みを打ち明ける機会を得ました。そこで始めて，自分の問題は先生がおっしゃった精神論ではないことを分かりました。学力不足のことが直接に指摘されて，ありがたったのです。それを機に，彼もファンちゃんに対する誤解を解けてくれました。なんだ，曾さんが傲慢な人ではなくて，単に要領が悪かったんだと。分かってくれました。それから，惜しみなく色々なことを教えてくれました。

その夜から，事態が一転しました。学力の問題なら，頑張れば解決できるからです。社会人の先輩の助けもあって，ファンちゃんがぎりぎりの線で最後の学力試験を通過し，博士論文を提出する資格を手に入れました。試験後，ファンちゃんが一時期精神的なバランスを崩し，ノイローゼになりかけたのです。そこで，夏休みの休みを取り，家に帰り漢方薬を飲み，体調を持ち直ったのです。

去年から今まで，２人の素晴らしい社会人先輩に巡り合いました。１人の先輩が仕事の合間と休み時間をファンちゃんの第２論文作成のために費やしてくれました。５０，６０

頁もある論文を１，２日のうちに読み終え，添削して宅急便で返してくれました。このやりとりを３回ほど続けてくれました。
　もう１人の先輩が物の見方がファンちゃんと違っているものの，心から心配してくれました。あるゼミの帰り道，その先輩がファンちゃんの相談に乗ってくれました。日本人は心で応援の気持ちを伝えると，テーブル越しでファンちゃんの左手をしばらく静かに握りました。その後，ファンちゃんの涙はしばらく止まりませんでした。小さいカクテルバーの中で，当時，先輩がさぞ迷惑がったでしょうね。神戸に来てから，過去を追悼するために，ファンちゃんは多くの涙を流しました。昔，流さなかった分までも一緒に流しました。過去の傷も，思い出を整理するたびに流された涙とともに，徐々に癒されていくと実感しました。
　２人の先輩の助けと台湾大震災の時，福田さんの奥さん方子さんを始め，神戸の多くの方の応援に触れられました。ファンちゃんがやっと人間が怖くない。人間を信じられるようになりました。世間では冷たい人もいれば，温かい人もいますと。自分もそうしたように，見返しを期待しないことは本当にあると。そして，何よりも自分には人を助ける気持ちも，能力もあると確認できたことが大切だと思いました。
　ロータリアンの皆様がファンちゃんに親切してくれたのも，学校の皆様が優しくしてくれたのも，ファンちゃんがファンちゃんだからと思います。ここで，出身背景も無ければ，成績の良さもありません。それらが憎しみの種にはなっても，愛の種にはなれないのでしょう。神戸大学の一人の台湾人先輩が，こう教えてくれました。彼がいろいろ見てきて，台湾大学出身者をひそかに嫌っていたが，ファンちゃんと知りあってから，台湾大学出身者が全部嫌な人ではないなと思うようになりました。
　ファンちゃんがここに来て，自分の価値を確認できました。それはファンちゃんが誰か，それとも何をしたから得られたということではなくて，自分自身にあることです。そして，自分が生きることにあるのです。ファンちゃんの価値は何かの貢献が期待されうるからではなくて，生きていること自体に価値があります。人様への貢献はファンちゃんが生きる結果であり，原因ではないです。
　親友が「あなたが死ぬと，私たちが悲しむのよ。」と言ってくれたのは同じ意味のでしょう。母の「学位がなくても，生きて帰ってくれ。」，父の「出稼ぎじゃない。」，みんなファンちゃんに同じことを伝えていると思います。もちろん，みんなのために，ファンちゃんがしてあげたいこともいっぱいありますが，それはファンちゃんが生きている結果であり，原因ではないと思います。日本にくる前のファンちゃんが生きることの重圧に潰されていました。そして，同じ因縁の地に，生きる勇気を拾い戻しました。それは台湾の家族，友達と，日本で出会った多くの人々のおかげだと思っています。
　今，人間は怖くありません。人間はただ弱いだけのです。だから，色々良いこともすりゃ，悪いこともします。そして，いつも忘れたくないのは，私も弱い人間の中の一員ということです。自分と他人の過ちを許しながら，ファンちゃんはみんなの中に生きていきたいと思います。もう，逃げるのは終わりだと自分に言い聞かせました。
　最後，１つのお願いを持って，今日の結びの話としたいと思います。みんなさんの周りに，「心配の要らない，しっかりしたいい子」がたくさんいていると思います。そういう子は，振り向いてもらうために，愛してもらうために，一所懸命いい子を務めたと思います。そして，自分の思いに反して，一所懸命いい子を務めた結果が「心配要らない」と言われ，一所懸命するほどほしい周囲の目が遠ざかっていく，要領の悪い子達です。そういう子に，どうかこのような言葉を掛けてやって下さい。「迷惑をかけてもいいよ。ドジを踏んでも，馬鹿をやっても，君が何をしなくても可愛いよ。」と。
　以上を以て，今日の卓話を終わりにします。ご清聴，どうもありがとうございました。